

十四期活動状況

（文責 栗田恭胤）

昭和三十九年度の十四期の活動状況を知らせてくれと頼まりましたが、何しろ運営委員になつてまだ日が浅く、これといつた活動はしていませんので、今年度の主な活動方針をお知らせ

することに致します。オ一に長年の夢でありました北海道旅行が実現されることになりました。これは一年のときから毎月わずかばかりのお金を貯金し、「ちりもつもれば何とやら」で、一年過ぎ、又一年過ぎそして三年目の今年になつてようやく、旅行に行けるだけの最後の金額に達し、その上に大幅に予算プラスして行くわけですが、あいにくと家庭の事情、個人的な事情により全員参加出来ない事を残念に思います。一年の夏十四期全員が集り、そして十四期全員がこの旅行に参加する事を決定し、この二年向北海道の資料を集め、プランをわり、そしてようやく旅行にありつけたと思ひや、色々な事情があつて全員参加出来ないのは残念であるが、しかしそれはそれとして旅行に行く人達は参加出来ない人達の分まで楽しくゆかいに、夏の北海道を心ゆくまで味わつてきて下さい、（お土産忘れないでね）

次にめぼしいと思われる計画は、去年の夏、オ一号の発行をみた十四期機関紙「流れ」を今年度も引続いて発行することである。「流れ」オ一号の発行は初めてのこともあつて原稿の集りもよく皆大いに協力しましたが、次のオ二号の発行たるや、原稿の集りが悪く機関紙委員の諸兄を大いに悩したものである。さて「流れ」二号に於て少し問題点があつた。それは十四期生一人／＼の持做、ニックネーム、趣味などが書かれてありましたが、その中に少々ゆきすぎと思われる点が見受けられたことである。このようなことを書くのは親睦のためにもなるが度々過ぎると逆の現象も表れてくる。これによつて十四期生相互に一時気まづい空気がだちこめました。これはそれ、互いに信頼

し合い友情の厚い我々十四期生は元の、いや前よりいつそう面結まかたくなした次第です。

人間は失敗しながらも、それにうち勝つて、さらに発展してゆくものであるが、この校園独「流れ」も我々同様さらに発展し、より立派なものにしていきたいと思ひます。

そして我々十四期生のいつまでも、妻のぬ友情の印として、そして又、我々十四期生の歩いて来た道の「道しるべ」としなれと思つております。

我々十四期も三重大学に入学して以来いつの間か、もう三年生となつてしまいました。

名実共に我々の三重大学の中心的存在、指導的な立場に立たされてしまいました。

この歴研の中に於ても十四期が活動の中心であり、今後の歴研のよくなるも悪くなるも、我々十四期生の働きにかんによると云つて決して言い過ぎではない。

我々が誇る先輩の残していつた伝統を守り、よき後輩をつくり歴研をさらに発展させてゆくのも我々十四期生の一人／＼の細い腕にかゝつてゐる。

十四期生諸君、元気でゆきましよう。